



# タナトフォビアの見る夢

つい3時間前、戦争の開始が正式に宣言された。

そこからの私の行動は、極めて迅速だった。

予め調査しておいた経路の関門を、予め想定していた手法で、淀みなく、躊躇いなく進んでいく。

そして、目標であるアルシアの眠る『白砂の檻』には、当初想定していた時間よりも5分早く余裕をもって到達することができた。

まだ発射の余韻が残る銃身を右脚付け根のホルスターにしまいつつ、見慣れているはずのその空間を見渡す。

巨大な半球状のドームには、真っ白な砂によく似た抑制物質が広がっており、その中央には天蓋付きの寝台と丸テーブルに2つの椅子が置かれている、清廉で、どこか物悲しい空間。

私達の思い出が眠る場所。それがこの『白砂の檻』である。

「……先生？」

眠っていたのであろうアルシアが、寝台に近寄る私に気づき、目をこすりながら起きる。

長い銀色の髪と、蒼い瞳が印象的な女の子。

白い肌と細い手足が、ガラス細工を思わせる女の子。

きっと、可愛く着飾れば全ての人の視線を奪うことができる女の子。

それら全てを否定する、その額から伸びる、異形の角。

アルシアという、極めて人間の少女に近い容姿に確固たる異常を併せ持つ彼女は、いつだって私を見つけると、そのきれいな瞳の蒼を輝かせてくれる。

彼女にとって私は、ただ一人の友人であり、師であり、そして、姉であり母なのだ。

「どうしたの、先生。今日は不思議な格好をしているね。すごく黒い」

私の白衣姿しか知らない彼女からすれば、それは自然な反応ではあるのだが、「黒い」の一言が精一杯の表現であることに、少しだけ私の心が緩んでしまう。

……それにしても、だ。

こうして、人を殺すためだけの格好をして彼女の前に現れなければならない日が来ることを、私は望んでいなかったはずなのに。

だが、今となっては逆に清々しい気分すらある。

これまでの全てを捨てて、本当の自分を彼女の前にさらけ出したからであろうか。

アルシアは、手を伸ばせば触れられる距離にまで接近した私の格好を、興味深く眺めている。

「アルシア、ここを出ましょう」

私がそう言うと、アルシアは最初、意味を理解できなかったようだった。

しかし、じょじょにその両目に理解の色が宿り始めると。

「外に出られるの？」

彼女は興奮を露わにし、寝台から飛び跳ねた。かつてないほどの喜びがそこにはあった。

その様子がどうにも愛おしくて、私はつい、彼女の頭を撫でてしまう。

さらさらとした髪の感触が、グローブ越しにも伝わってくる。

「ねえ、先生。どうして外に出られるの？ 先生が連れて行ってくれるの？ 本当にいいの？」

「うん。いいんだよ。先生が外に出してあげる。アルシアのみたいもの、一緒に見ようね」

「本当？ 先生も一緒なの？ 私、海見たい！ 先生と一緒に、見たい！」

「うん。うん。いっぱい見よう。いっぱい。先生が全部見せてあげるから」

アルシアは「やった！ やった！」と何度も繰り返し、嬉しさを抑えられなくて、その場で飛び跳ねる。ぴょんぴょんと跳ねて、ときたま私に抱きつく。

……思わず涙が出そうになった。

私は、アルシアがこんな風に喜ぶ姿をずっと見たかった。

ずっと、待っていたのだ。

私の深淵で、この13年間ずっと燃え盛り続けていたものを、もう止めることはできない。

この白砂の檻に来るまでにぶち抜いてきた人間の脳漿ですら、内なる炎の糧になっている。

もう誰にも止めることはできない。絶対に。

「—————ねえ、先生」

アルシアの呼び声が、私に再び冷静さを与える。

「私ね、こんな日が来るのをずっと待ってた！」

そう言って笑顔を見せるアルシアと、心が通じ合ったような気がして、私も笑ってみせた。

巨大な黒い物体がいくつも空を飛んでいる。

それらは静かに音を立て飛行しながら、その身に宿す暴力を解き放つのを待っている。

海洋のど真ん中で、雲を切り裂くほどの高さの黒い塔が聳えている。

それは時折不可思議な高音を響かせながら、深く海の底に沈めた憎悪を研ぎ澄ませている。

雲一つない青空。

その下で、地平線まで伸びる草原の道を、私達の車が走っている。

車種はヴィンテージものの軽トラックだが、その分ろくに舗装されていない道の感触が座席に伝わってきて、趣がある。

アルシアは助手席から、わあわあと声をあげながら窓の向こうを見ている。時折、何かを指さしては私に問うてくる。

私は運転をしながら、それに答える。

全開にした窓から入り込んでくる風は、春の陽気と、生き物の気配を肌に打ち付けてくる。

草原は右も左も果てまで続いており、建造物など一切見えない。

「素敵！ 全部、先生の言ったとおり」

そう言ってこちらを向いたアルシアは、私が予め用意しておいた民間の衣服を着ている。

角さえなければ、今すぐにでも市街に行けそうなぐらい似合っていた。

「何が、素敵なの？」

「草原も、車も、外も、空も、みんな先生の言ったとおり。風も、匂いも、夢見た通り！」

「アルシアは、その中でどれが好きかな」

「空！ ねえ、先生。あれが空の青なのね」

「そうだよ。アルシアの瞳と同じ色」

「私、空の青が好き。なんだかとても自由な色をしているの。見ていると溶けてしまいそう」

「素敵だね」

「うん！」

私はその後、アルシアに荷台に乗ることを提案した。

風をもっと気持ちよく感じられると言われ、アルシアは怖気づくこと無くそれを受け入れる。

私は、アルシアと荷台をベルトで結びつけ、しっかりと掴まるように言ってから、車を動かし始めた。

後ろから、アルシアのさらにはしゃぐ声が聞こえる。

私はその様子を感じながら、右耳に仕込んでおいた極小の機械を起動した。

「————天————起動を————」

若干のノイズを交えた音声を聞きながら、未制限量の非商用煙草を取り出し、それを口にする。

青い空、緑の草原。

終わりへの囁き。甘き死の訪れ。

春の風。煙草の香り。

星の歓喜。命の悲鳴。

視覚と嗅覚、聴覚の圧倒的な齟齬を感じながら、煙草の煙は窓の外へと流れていく。

「先生！ もっと風、ちょうだい！」

アルシアのその声が聞こえて、私はアクセルをおもいっきり踏み込んだ。

———世界の終わりを描くお話が、好きだった。

理不尽が、あっさりとした人の積み上げたものを踏みにじっていく物語が好きだった。

私、ワタセ・クオンという人物は、幼少の頃からそういった終末思想のようなものに、奇妙な関心があった。

憧れていたと言ってもいい。

何故そんなにも終わりに恋い焦がれていたか。それを明確な言葉で整理するのは難しい。どうやら複雑な要素が絡み合い、いくつかの偶然がそれを固めていったせいで出来上がったもののようなのだ。

……「何故」を説明することは難しいが、結果をすくい取ってみせることは容易い。

私は、そういう呪いに近い想いを抱き続け、やがて、いつの間にか、世界の中枢に関わってしまっていた。かつて恋焦がれていた「世界の終わり」に、干渉できる立ち位置にいたのだ。

満天の星空。

レムナントを煌めかせながら輝く、半壊した月。

それらの優しい光の下、私とアルシアは同じ毛布にくるまって夜空を見上げていた。

近くに流れる川のせせらぎが、まるで水の中から空を見ているような気分させてくれる。

「先生は、どこでお料理を勉強したの？」

アルシアが星を見ながら私に問う。

さっき食べた料理を思い起こす星の並びがあったのだろうか。

「先生はね、生まれた時から一人だったの。だから、ご飯も何も全部自分で用意しないといけなかったんだ。

それで、勉強するしかなかったってわけ」

「そっか……」

「だからね、先生は、アルシアに自分の手料理を振る舞えて嬉しかったよ。誰かに私の料理を食べてもらう日がくるなんて思わなかったから」

アルシアを抱きしめる腕に思わず力が入る。

私の腕に添えられていたアルシアの手に、返すように力がこもっていくのが感じられた。

「先生のシチュー、とっても美味しかった。今まで食べたもののなかで一番美味しかった」

「うん。ありがとう。アルシアが美味しい美味しいって食べてくれたのが私も今までで一番嬉しかったよ」

「えへへ」

……真っ当な家族がいれば……

こんな確認を取ることもなく、心を通わすことができるのだろうか。

いや。

やはり、当たり前のことだからこそ普通は認識しないのだろうか。

アルシアも、そして私も、誰かと食事を一緒にすることがあんなにも幸福だなんて、知らなかった。

これはきっと、憐れに思われることなのだろう。

「……私、夜は暗いって聞いていたけれど、実際にこうして見ると、ずっと明るく感じる」

「そうだね。今日は雲がないからか、月と星の光がよく届く」

「街は灯りが多すぎて、星が見えにくくなるんだよね」

「うん。だから、今私達を感じている明るさとは違う感じになる」

「それって、どんなの？」

「もっと眩しくて、うるさい感じかな」

「そうなんだ」

アルシアが手を伸ばして、自分の視線の先で振り始める。

「あの一つ一つが、色々なものを宿しているのかな」

「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない」

「私達って、すごくちっぽけなんだね」

「そうだね」

ちっぽけだけれど。

私達は、私達の命を通してでしか、この世界を見ることができない。

「ねえ先生、明日はどこに行くの？」

私の方を見て、アルシアが問うてくる。

「アルシアは、何が見たい？」

「うーんとね。そうだなあ。森もいいかなあ。でもやっぱり海がいいかなあ」

「ゆっくり考えていいよ。まだ時間はたっぷりあるんだから」

そう言って私は星空を見上げた。

その時ちょうど空を横切った光は、きっと流れ星ではなく、堕ちた人間の欲の残骸だろう。

アルシアは知らない。

この星空の内、本当の星が果たしてどれほど存在しているかということ。



仮に神という存在がいたとして。

それは果たして、如何なる要素により神と認識されるのだろうか。

唯一無二であることか。

理解不能であることか。

全知全能であることか。

いや違う。

私はこう考える。

あらゆる種において、神と認識される存在は、その種を裁く権利と力を持つ者だと。

絶対の権利と、絶対の能力。それにより、種の全てに等しく終わりを与える者だと。

故に『死』とは……私にとって限りなく神に近い概念であった。

何故こんな回想をしているか。

これは、再銘記だ。

私がどうして等しく死をもたらすものを、創ろうとしたのか。

その根源にあった思想と、憧れが何か。

結果的にそれが、何故世界の中樞を揺るがすものへと至ったか。

再銘記。

全ては偶然である。

そして、理不尽である。

ただ言えることは。

アルシアを創り、育て、笑い合うにつれ、私の中心を構成していたある憧憬は鳴りを潜めた。

代わりに新たな喜びと悲しみと、そして、怒りが生まれたのだ。

ノイズが走る。

やがて明瞭になっていく音声。

「天使達の起動が確認された。いよいよだ」

「君たちは今どこにいる？ まさかそちらにも影響が出てはいないよな？」

「いざ始まってみると案外あっけない。でも、これぐらいあっけない方が、やはり美しいよ」

「あれだけの『黒』が無駄になったという事実も相まって、清々しい気分になるね」

「ところで君、私の煙草を盗んだろう」

「あれは君が思っている以上に良い物だぞ。大切にしてくれるとありがたい」

「……それとは関係ないが、最近また酒を呑むようになってな」

「ふっ、自分で笑ってしまう。ジョーク大会でも開かれていたら結構いいところまでいったのにな」

「なんだか、昔よりずっと心が落ち着いているよ」

「……ああ、それにしても今日は暑いな」

「太陽も近い」

「だが、外は静かだ」

「夢を見ているようだな」

「天国と言うのに相応しい光景だ」

「……天使はやはり、美しくなければならぬな……」

「なあ、ワタセ君。それでも、私は。本当に、君が正しいと思うよ」

「勿論君は後悔なんてしていないし、今更私が言って嘆くような人間ではないだろうがね」

「でも念を押したくはなる。良かったんだよ。それで。君は、君たちは、そうあるべきだ」

「ああそれにしても残念だ。こんなに美味しい酒を君に振る舞えないなん———」

ぶっ、とそこで音が途切れる。

……静寂。

## 砂

---

アルシアは昨日作ってあげた花冠がよほど気に入ったのか、今日も朝から頭につけている。

「ねえ先生、もうすぐ？」

「もうちょっとだよ。ほら、ここを上れば……」

アルシアの手を引いて坂の上に到達すると、急激に視界が開けた。

そこには真っ白な砂浜と、青い海が広がっている。

「わあっ」

アルシアが駆け出す。

砂浜の上を走り、海まで、真っ直ぐに駆けていく。

その無垢な笑い声が、誰もいない砂浜に響く。

「すごい！　すごい！」

両手を大きく広げて、潮風を一身に受けるアルシア。

「先生、これが海の匂いなんだね！」

アルシアの足跡を消さないようにしながら、彼女の元へと近づく。

「海に入ってみたら？」

私がそう言うと、はっとしてアルシアが足元を見る。

彼女は、波が打ち寄せるぎりぎりの所に立っていた。

「入っても、大丈夫？」

「勿論」

私はアルシアの前で靴を脱ぎ、そして、その横を通り過ぎ、波に両足を晒してみせた。

彼女は私の様子を見て、慌てて自分も靴を脱ぎ、海の中へ恐る恐る入り込む。

「冷たい！」

私達の両足から波が引き、そしてまた、寄ってくる。

「なんだかちょっとひりひりする……？」

「海水だからね」

「不思議。面白い」

慣れたのか、アルシアがぱしゃぱしゃと歩き始める。

水しぶきが僅かにたつ度に、陽の光が反射される。

それは、彼女の長い銀髪と相まって、神秘的なものを感じさせる光景だった。

アルシアと私は、しばらくそうやって、海岸を歩いていった。

時折、昨日食べたものの話を交えながら、ゆっくりと、長い長い海岸に足跡を残し、それを波にあずける。  
やがて。

「……この海の向こうにも、海は続いているの？」

不思議な質問をされて、少し頬が緩む。

「続いているよ。ずっと向こうまでね」

「……生命は、この海から生まれたの？」

「ずっと大昔にね」

「私も海から生まれたかったな」

思わず、アルシアと目が合う。

「先生」

彼女の瞳は、今日も、空と海を繋ぐ蒼を宿している。

「私、もう死んじゃうの？」

アルシアは、笑って、そう問うてきた。

惑星内共存意志包括兵器。

それは、人類が自らを裁くための最高の自死装置であり、そして最大の自我である。

全ての人類の潜在意識は、かの兵器に集約され、そして、かの兵器と直結する。

人類が共通して放つ、種としての『意志の波』。

それがあつた色に染まり、ある意志を顕在化させたとき。

この兵器は、然るべき命令をもって、人類を裁く。

人類は、この兵器をもって、理不尽を排除した種の実現しようとした。

結果、それは成功したのかもしれない。

神が裁く前に、人は人を裁く力を得た。その仕組みを完成させた。

そうすることでしか、人類はもう、この星に存在することが許されなかった。

銃口を脳天に押し付けるように。

刃を首元に触れさせるように。

死を手にし、律することでしか……もう人類は、自分たちがどこに向かっているかわからない程にまで衰退していた。

アルシアは、人類に自死を命ずる運命であつた。

同じ人間同士で、憎悪を向け合うことをついにやめることができなかつた人間に対し、大いなる多数決を以て、天使の名の下に、死を下す。

かの黒き炎を呼び起こして。

この星の全てを巻き込んで。

彼女自身を犠牲にして。

……同じ人間のような存在でなければならなかつた。

全ての人間の意志を繋ぎ止めるには、同じ人間としての階位に留まることが求められた。

神ではだめなのだ。

人でなければ、いけないのだ。

だからアルシアは、名ばかりの存在となつた。

人間の最後の欲求を満たすためだけに、根本が人間であることを強いられた。

彼女を純粋な神にすることができれば、どんなによかつただろうか。

なまじ人の心を似せているからこそ、愛されることも、孤独も、風の心地よさも、星々の煌きも、暖かい食卓も、空と海の青さも、その全てがわかるからこそ、彼女だけが最後の最後に理不尽を突き付けられる。

私は、かつて世界の終わりに憧れた身として、理不尽に恋い焦がれたものとして。

そして、アルシアの家族として。

あの憧憬を取り戻すことを、誓つた。

美しい終わりを描くことを決めたのだ。



## 夕日

---

水平線の向こうに、陽が沈んでいく。

私は、かつて星空を見た時のように、アルシアを抱えて砂浜に座っていた。

アルシアは、沈んでいく太陽をじっと眺めている。

「――ありがとう。先生」

アルシアが小さな声でそう言った。

「先生があの日、外に出してくれてから、今日までずっと、本当に楽しかった」

「私もだよ」

嘘ではない。

たったの数週間だが、アルシアと見た世界は、美しかった。

アルシアとの日々は、これまでの人生で間違いなく最良のものだった。

私は幸せだった。

「……先生、私はどうなるの？」

アルシアが、落陽から目を離すこと無く、私の手を握る。

「私、きっと、壊れちゃったんでしょう？」

私が答えずにいると、アルシアも無言になる。

やがて。

「どうして教えてくれないの、先生」

震える声で、アルシアが言う。

「……聞こえないの」

その頬に、涙が伝うのが見えた。

「あんなに聞こえていたはずの、人間の声が、聞こえないの」

ついに、アルシアが私の方を向いた。

「ずっと聞こえていたのに、この前から、急に聞こえなくなって。何も感じられなくなって。私、おかしくなったんだよね？ これって、おかしいよね。だって、私はそのために角があるんでしょ？ 先生とは違って、角があるのに、何も感じられないの。おかしいよ。それって、私じゃないよ。どうして？ 私は、もうおかしくなっちゃったんでしょう？」

私は、まずアルシアを抱きしめた。

そして、両肩に手を置いたまま、真っ直ぐ彼女を見つめる。

「アルシア。よく聞いて」

「……先生？」

「あなたが人間の声が聞こえなくなったのは、あなたがおかしくなったからじゃない。私があなたに魔法をかけた。ただそれだけ」

「……魔法？」

「アルシアを幸せにするための魔法だよ」

アルシアが、美しい世界で在り続けるための魔法。

アルシアが、人のエゴにより死ぬことを防ぐための魔法。

「……先生は、どうして」

「アルシア」

彼女の両肩に乗せた手に、自然と力がこもってしまう。

「あなたは、これから、私と離れなければならない」

アルシアの身体が、大きく震えた。

「大丈夫。あなたは、一人じゃない。これからもあなたは、この美しい世界で、生きていける。あなたは、今日までのように、風や木々、空や星々、海を愛することができる」

「どうして？ 先生と離れるの？ そんなの嫌！」

「……アルシア」

もう一度、私はアルシアをかき抱いた。

「先生はね、人間だから。もうこの星にはいてはいけないの」

「……え？」

「今日まで、私はわがままを通してきたの。最後の人間として、今日まで、ずっと」

「待って、先生。意味がわからないよ。どういうこと？」

「大丈夫。アルシアは一人じゃない。ただ私とは一緒にいられないだけ」

「嫌だ！ 意味分かんないよ！ 先生！ 嫌だ！ なんで、そんなこと言わないでよ！」

「私は、あなたを愛しているから。ずっと、これからも。あなたに生きていて欲しい。ただそれだけなの」

「やめて、やめてよ。先生、変なこと言わないでよ！ 先生！」

「アルシア———」

アルシアがあらん限りの力で私に抱きついてくる。

わっと泣いて、私の胸元を濡らす。

水平線の向こうに、太陽は沈み。

世界は闇に包まれようとしていた。



## 祈り

---

後悔は無い。

と、言えば嘘になる。

アルシアを最後の最後で泣かせてしまったこと。

そして、彼女にどうしても拭えない別れの傷を残してしまうこと。

しかし、こうするしか無かったのも事実なのだ。

私は人類のエゴを、自分のエゴで上書きした。

種を滅ぼす最後の因子となることで、アルシアを救うことを選んだ。

星の全てを巻き込む心中ではなく。

静かな、そして、安らかな死の訪れを構築した。

私は、自分が世界の中枢に関わった意味を、『そうすることができる立場』として理解したのだ。

個の起こしうる最大の理不尽。

その果てに広がる人類のいない世界は、どこまでも美しく、そして、無垢であった。

これからこの世界は、限りなく人に近く、そして、決定的に違うアルシア達のものになる。

世界を愛するのも、憎むのも。

全て台無しにすることも。

みな無垢なる理不尽の手の上にある。

私はその美しい世界に残る最後の意志だ。

物語の最後を描くために、消えなくてはならないものだ。

だから、躊躇いなく。

私は自死の装置を起動した。

その瞬間、アルシアとのこれまでの思い出が一気に脳内を駆け巡った。

———健やかなるときも

———病めるときも

———喜びのときも

———悲しみのときも

「ありがとう、先生」

ありがとう、アルシア。

# 海

---

波の音が響いている。

砂浜に角の生えた一人の少女がいる。

彼女は、終わりのない眠りについた女性を抱きしめている。

朝も。昼も。夜も。

雨の日も。晴れの日も。

春も。夏も。秋も。冬も。

「ねえ、先生」

少女は、海を見ながら口を開く。

「綺麗だね。この世界は。本当に、綺麗」

ふと、少女に影が落とされる。

少女が振り向くと、そこには、翼を生やした別の少女がいた。

「————私も、綺麗だと思うよ」

翼の少女が、角の少女に微笑みかける。

波の音が、絶え間なく響いている。

タナトフォビアの見る夢  
<http://p.booklog.jp/book/91683>

著者：彼岸堂

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/higandou/profile>

感想はこちらのコメントへ  
<http://p.booklog.jp/book/91683>

ブックログ本棚へ入れる  
<http://booklog.jp/item/3/91683>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ